Operation Raleigh News

Operation Raleigh
DENSO

No.7

昭和60年(1985)4月5日(金)
毎月1回発行

●発行所　オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号
電話　東京(03)544－7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

1985年次募集要項発表　南太平洋・豪州へ30名

1985年次オペレーション・ローリー日本代表派遣青年募集要項が3月20日、ORJCから発表されました。基本的な内容はほぼ昨年次と同じですが、体力および泳力が重視されていることが注目されています。募集要項の要点はつぎのとおりです。

●主催　ORJCオペレーション・ローリー日本委員会
●協賛　日本電装株式会社
●応募　ORJC指定の応募用紙に必要事項を記入して郵送。応募用紙は事務局に請求のこと。
●宛先　オペレーション・ローリー日本委員会事務局＝東京都中央区築地1－7－10（築地オーミビル502号）
電話(03)544－7413
●締切　昭和60年5月31日（必着）
●定員　30名（来年次も30名予定）
●資格　①満18歳以上・24歳以下
②男女不問
③日常英会話（英検2級）
④450m以上の泳力
⑤心身とも健康
⑥OR英国本部規定に準拠したORJCの選考基準を満たすこと。
●選考　★第1次＝書類審査
★第2次＝体力審査（東京・名古屋・大阪）
★第3次＝面接および論作・英語力審査（東京・大阪）
●審査　ORJCから委嘱を受けたORJC実行委員会、ORJC事務局
●活動　昭和61年3月～62年2月のうちの1フェイズ（3～4ヵ月）に参加（詳細第4面）
●費用　参加実費は日本電装株式会社の協賛によりORJCが全額負担。（ただしパスポート申請費・健康診断費を除く）

なお、ORJCオペレーション・ローリー日本委員会の構成メンバーは、昨年次同様つぎの5氏です。

委員長　永井　道雄（国連大学学長特別顧問）
委　員　祖父江孝男（放送大学教授）
委　員　矢野　暢（京都大学教授）
委　員　見田　宗介（東京大学教授）
委　員　田辺　守（日本電装取締役副社長）

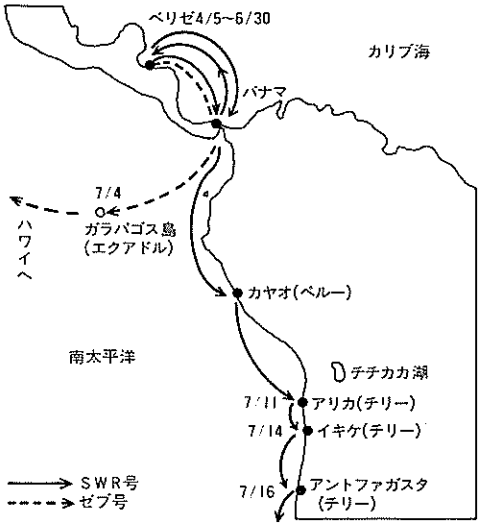
活発に募集広告

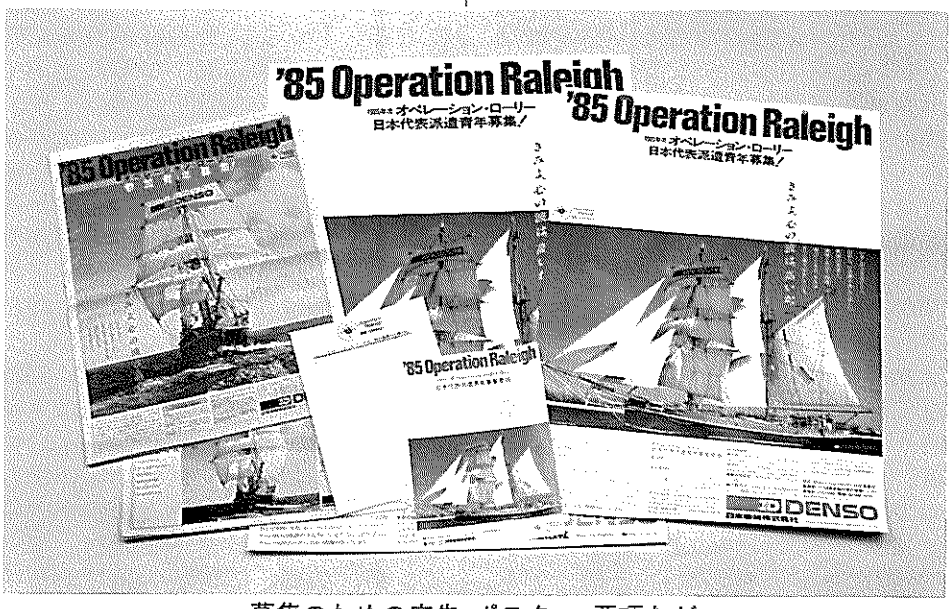
1985年次オペレーション・ローリー日本代表派遣青年の募集告知広告は、3月18日付の日本経済新聞を皮切りに、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、中日新聞などに掲載されました。また雑誌広告についても、ポパイ、ブルータス、ナンバー、セイルなどに順次掲載される予定です。

SWR号・ゼブ号

航海スケジュール

バハマ諸島に派遣されていた大見則親君（帰国）がSWR号で入手した、SWR号とゼブ号の航海スケジュールをご紹介します。





募集のための広告、ポスター、要項など

コスタリカ組(第4陣) 苦闘のレポート

２月中旬～５月中旬の予定でコスタリカに派遣されている前橋宏美さんと山内泰胤君から手紙が届きました。コスタリカのフェイズは、これまでの海洋と異なり、雨林（Rain forest）のため、かなり趣きが違っているようです。まず、前橋さんの日記風の便りから抜粋してみましょう。

前橋宏美さん

〔２月14日〕午後５時40分発、日本航空ロス行きに乗る。エグゼクティブでゆったりして快適。午前10時ロス着。ホテルで１泊。

〔２月15日〕夜12時25分メキシコ航空で、メキシコシティー、グァテマラを経て、午前10時にやっとコスタリカ到着。車でアテナスのキャンプへ。バンガローのような建物に入り、プールで泳いだり、食堂で食事したり、ここまでは天国。午後３時ミーティングでグループ分け。大きな樹の下でのミーティングは青空教室のよう。私はＢ、山内君はＣグループに決定。Ｂグループは雨林→考古学→サンゴ礁というコースで一番おもしろそうだが、一番キツイらしい。他のベンチャーたちもチェンジしたら、といってくれる。荷物の最も重い私は必死にがんばったけれど、結局ついて行けず、香港からの仲間に助けてもらい、森の中の迷子にならずにすんだ。

すごい人気のハッピ

夕食後のレセプションで、ＮＤマーク入りのハッピとＴシャツを仲間に配った。ものすごい人気で、あげられなかった仲間に文句をいわれる始末。デンソーのみなさん、ハッピは恐しい人気です。デンソーというスポンサーに興味があって、いろいろ聞いてきます。橋本かおりさんにもらった英文パンフが役立っています。

〔２月16日〕朝５時30分起床。６時朝食、８時雨林行きの70人がバスでアテナスキャンプを出発。仲間は８割が英国から、あとはオーストラリア、カナダ、香港、オマーン。半分は女性だが、とくに英国女性はみんなすごく強くてたくましい。午後３時やっとナショナルパークの人口到着。キャンプ地づくりでも、みんなの手際のよさにびっくり。食事はインスタントスープのようなものだが「空腹にまずいものなし」とはホント。シュラフ（寝袋）は不要という話だったが、熱帯雨林とはいえ夜は寒いくらいだから、むしろ必需品。８時就寝。夜中に大雨が降った。

〔２月17日〕朝６時起床。６時30分食事。またしてもインスタントスープ。おかわりはできるみたい。この日は川を渡って、キャンプ地を移動。山内君は体力があるので、あちこちから声がかかるが、私は早くもヘバリ気味。英語力より体力を実感。

ぬかるみと蚊の攻撃

〔２月18日〕キャンプの近くに川があるので水は豊富。しかしドロドロの道を重い荷物をもって歩くのは大変。このあと２週間で 150キロの山道を越えられるかしら。首を蚊にさされて、これもツライ。髪を切りすぎるのも考えものです。

〔２月19日〕比較的楽な一日。竹を切って運び、ベンチやテーブルをつくる。作業の合い間には、お茶を飲んだりも……。さらにトイレづくりやヘビを避けるための片付けなど。夜は、私の荷物が重過ぎるので、仲間が寄ってたかってチェックし、軽くしてくれた。

〔２月20日〕山内君と別れて、別のキャンプへ。ジャングルのぬかるみを足をひき抜きながら進む。１時間歩いて休憩。それだけでバテバテ。その後２時間ほどでついにダウン。私だけ、森林看視小屋に残されそうになる。しかし、その日のうちにがんばって、仲間に追いつくことができた。

〔２月21日〕ちょっと申し訳ないがきょうは私だけ荷物なし。相変らずどろどろの道。うっかり木をつかんだりすると蛇や虫がいるので気が気でない。５時間歩いて、キャンプ地づくり。私はボーッと見ていただけ。体がいうことを聞いてくれない。

〔２月22日〕食料をとりに行く部隊が出発した後、残った私たちはキャンプの整理、整とん。しかし一日中体がダルイ。少し夕食の手伝いをしただけ。夜、満天の星と虫の声の中でキャンプファイヤーを囲む。スペイン語、英語、広東語の飛びかう中で幸福な気分。「大草原の小さな家」にこんな場面があったなあ。

〔２月23日〕きょうはアリスンの誕生日。22才。何もなかったけれど、みんなでハッピーバースデーを歌って祝う。私たちのメンバーは男6人、女６人の合計12人。みんな個性豊かです。

一番星がきれいだ

〔2月24日〕私たちは急にヒマになる。というのは科学者がまだ到着しないため、科学調査が始まらないから。このキャンプ地も仮のものでまた移動することになるけれど、いまは満足な気分。異文化を背負った人々と自然の中で暮らす楽しさ。あふれんばかりの緑、鳥や猿の声、陽の光、満天の星。金星（一番星）がとてもきれい。

〔３月４日〕ちゃんとした誕生日を祝いそこなったアリスンと３月５日が誕生日のアンジェラのバースデーパーティ。パンやラム、バナナをたき火を囲んで食べる。月も明るく、照明なしで、みんなで狂ったように遊ぶ。

自分を見失なうな

山内泰胤君

続いて山内君のレポートをご紹介します。

肉体的にも精神的にも相当タフさが必要です。英国のベンチャーが大半を占めるので、どうしても英国中心の企画となり、日本人は最初に興味をもたれるだけで、最終的には相手にされなくなるのでは……と思いました。恐らくどこかで孤独になるでしょうが、自分を見失なわず３ヵ月を過ごすことが必要だと思われます。英語が弱いので、命令を間違え、必需品をほとんどサンホセに送ってしまい、約１ヵ月シュラフも救急医療品も防水ジャケットも食器もなく、過ごすはめになってしまいました。食器は前橋さんから借りたのですが、夜はとても寒く震えています。ベンチャーたちはみなまじめにＯＲの企画に取り組んでいます。彼らは初めからコスタリカが雨林のメッカということを知っていて、ここを選んで志願しているわけです。その点が僕の場合とズレがあるように思います。これから出発する日本のみなさん、いつか自分たちも苦しい思いをするのではないかと心配しながら、しっかり準備をしてください。

バハマ組 4人とも 真黒で元気に帰還

第3陣としてバハマ諸島でのフェイズに参加していた戸崎肇・堀内一秀両君は3月9日正午成田空港に帰

還しました。また、大見則親・小俣博泰両君は3月19日午後3時に成田空港に帰ってきました。

4人とも真黒で元気いっぱい。バハマ焼けといったところ。小俣君は帰国直後の感想をつぎのように語っていました。

バハマ現地の人々に、歓迎パーティやホームスティなどでいろいろお世話になりましたが、十分なお礼ができなくて心残りです。現地の人々とのコミュニケーションのためにももう少し自己表現力があればよかったと反省しています。活動については、自分を売り込むことが大切なの

を痛感しました。言葉のハンディキャップもありますが、自分の論理を主張し、相手を説得すれば、意見が通ることもわかりました。そのためにも得意な分野を何かひとつでも持つことです。

わが冒険旅行 3つの反省点

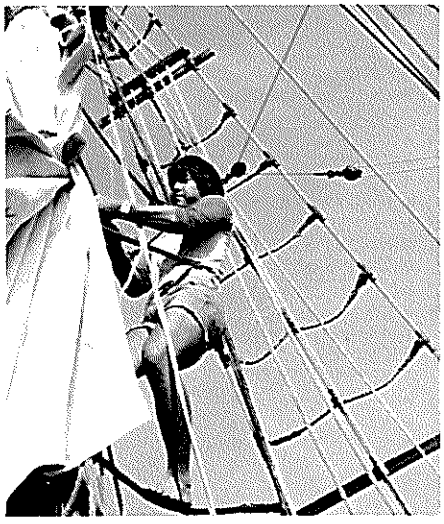
1984年次第1陣　桃井和馬

ここに今回の私の旅において反省すべき点を記したいと思います。

1.持物の多さ。私のフェイズが最初であり、かつ、旅慣れてないせいもありかなり無駄、つまり冒険という名のもとにおいては、必要以上の品々が背中にしょった大きなザックの中にあったように思われます。服もイギリスの連中はかなり質素でした。Tシャツも3枚位しかなく、1枚を穴があいても着るという執念深さです。と同時に現地で買ったり、

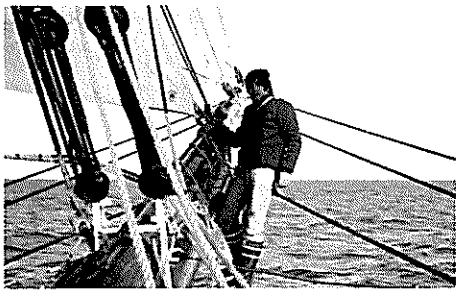
スポンサーからのプレゼントなどの物をいれると日本から持っていく服などは最低以下でもよいのではないでしょうか。礼服なども全くいらないものでした。なぜなら、迎える側も私達が冒険の一環としてその土地にいることを承知しているからです。(必要な時はORのTシャツかトレーナーを着ただけで十分でした。)それ以外に必要のない物もまだたくさんありましたが、基本的に他の物で代用できるものは持っていかないことです。限られた荷物。この中でいつも頭を使い生活を切り抜ける。これも冒険の楽しみの一つだと思うのです。

2.全行程を通して何度も読み返すことのできる本を持っていかなかったこと。冒険。それは自ずと日常の生活とはかけ離れた時間になるはずです。ですから日記を丹念に書くこと。いろいろな国の友達と交流を持つこと。やることはたくさんあります。そんな中にあっても、じっくりと本を読む時間はちゃんとあるのです。特に苦しい中にあって読む価値



のある一冊の本。きっと何かを与えてくれます。行く前に日本でテーマを決めてしっかり選んでいってください。

3.訪れる国々、他のベンチャーの国々についての知識が少なかったこと。それぞれの国には現在に到るまでの時の流れがあるのです。よくいわれることですが、これを知ってか



らその国に接するのと、そうでないのとでは、最終的に得られる事柄に雲泥の差が生まれてきます。例えばイギリスが4つの国から成り立ったという史実。このことの現代における影響。国々の宗教とその特長など知っていると一歩踏み込んで彼らの生活を見て、理解することが可能となるのです。

まだ、いろいろな反省点を挙げることもできますが、基本的には、これらの3点が私の反省すべき点だといえるでしょう。しかし要は冒険。やはり一番大切なのは、過程において反省すべき点を絶えず考え（一日の終りに反省する時間を持つのもよい）、反省点が見つかったなら、すぐ善処することです。臨機応変。これが十分にできなかったことが私の一番の反省点だと思われます。

日本代表派遣青年のページ

バハマ組への帰国インタビュー

バハマ諸島のフェイズに参加した4人のうち、堀内一秀君と小俣博泰君に質問してみました。

――参加フェイズの印象は？

堀内　冒険という意味ではかなり物足りなかった感じです。バハマはダイビングぐらいしかすることがありません。おもしろそうなことは、どうしても経験者にとられてしまいますので……。

小俣　少ない食料の中で、キャンプし、親友もでき、外国人の国民性を知ることもできました。美しい大自然にも感動し、体力もつきました。苦しい船酔いも体験し、体ごとぶつかっていき、働きぬくという自信もつきました。

――有意義だと思ったプロジェクトは何でしたか？

堀内　あれだけ多くの若者がいろいろな国から集まり、共同生活をしたこと。

小俣　タ一ク島・カイコス島での海洋公害調査のための熱帯魚観察やほら穴でのコウモリ採集です。

――行動記録を教えてください。

堀内　12月いっぱいはグランドバハマでベースキャンプの整備、人間の磁気感知能力の調査、各種のレクチャーでした。1月1日から22日まではキャット島での洞窟調査。僕はおもに測量を担当しました。他のグループはブルーホールや淡水亀の生態調査をしました。1月22日からは、グランドバハマで国立公園の建設。そのあいだにダイビングの練習もしましたが、基本的にはセメントを混ぜて、一輪車で運ぶ毎日でした。

小俣　12月いっぱいまでは、堀内君たちと同じです。その後SWR号に乗って、タ一ク島、カイコス島に上陸。スキューバダイビングの訓練を受けました。1月8日からはゼブ号に乗船、1月17日までゼブ号。スキューバダイブや熱帯植物の講義を受けました。1月30日ゼブ号でドミニカ共和国に上陸し、観光。2月3日ミドルカイコス島でコウモリやナメクジの採集。2月23日ゼブ号でナッソーへ最後の航海をしました。

――楽しかったことは？

堀内　陽気な連中との命がけに近いほど真険な悪ふざけ。国立公園の開園パーティ。

小俣　ミドルカイコス島での地元の人々と交流できたこと。さんご礁にもぐり、海ガメ、エイ、熱帯魚をみたこと。外国人ベンチャーとの交流など…。

――苦しかったことは？

堀内　食料不足、睡眠不足、真水不足。語学力不足による大小の誤解。

小俣　胃が持ち上るような船酔い。暴風雨の中での舵とり。食料不足。自分にまかせられた仕事を失敗したことなどです。

――日本人と外国人の違いについて一番痛感したことは？

堀内　外国人は自分の主張をもっていること。

小俣　ダイレクトな表現が外国人のすごさだと思いました。

●1985年次合格者の活動スケジュール

フェイズ	日本代表(全体人員)	フェイズNo.	日程	主な活動内容
トンガ・フィージー ソロモン諸島	3名(20)	5A	1986年3月12日～5月21日	科学的探検 ●諸島めぐりプログラム―植物・動物群の調査 ●医学的に重要性をもつ虫の調査 ●異なった緯度における人間の航海術、磁気感知力の調査 ●鳥類学的調査　●さんご礁観測プログラム 共同作業 ●ソロモン島で新しい赤十字センターを建設するプロジェクト
オーストラリア	6名(250)	6A	1986年5月8日～7月16日	科学的探検 ●ノースウェストにある熱帯雨林調査 ●有袋動物(ねずみ、カンガルーなど)の生物学的研究 ●ギブソン砂漠の生物学的調査 ●南オーストラリアの野生動物プロジェクト 共同作業 ●ハンディキャップのある子供の励みとなる玩具づくり 冒険 ●ヴィクトリアにおける鉱物調査 ●らくだに乗ってギブソン砂漠横断
	6名(250)	7A	1986年7月16日～9月24日	
パプア ニューギニア	3名(50)	6B	1986年5月11日～8月8日	科学的探検 ●海水ワニの生息状況調査 共同作業 ●西部地区における水資源開発作業 ●トレーニングセンターの植木、排水、壁などを修復 冒険 ●滅びた部族の地域を探検 ●大とかげの調査と研究
ニュージーランド	6名(100)	8A	1986年10月1日～12月10日	科学的探検 ●フィヨルド地域のマオリ族の遺跡の考古学的調査 ●特にガンの薬として有益な海草調査 ●ペンギンの海岸沿いからの観測 冒険 ●ジェットボートでの探検 ●いかだで川を下る
	6名(100)	8B	1986年12月10日～1987年2月8日	

オペレーション・ローリー＆日本電装

第3陣 日本電装へ

3月27日(水)第3陣の戸崎、堀内、大見、小俣の4君がそろって日本電装本社（愛知県刈谷市）を訪問しました。日本電装からは田辺副社長、稲生常務らが出迎え、冒険旅行体験者ならではの話がはずみました。

事務局NEWS

3月末で788人 OR募集要項請求者数

1985年次オペレーション・ローリーの参加青年募集は3月20日(水)にスタートしましたが、3月末日現在の募集要項請求数は788人にのぼっています。内訳は男性403人、女性385人。地域別では東京、大阪、愛知の順で、アメリカからの問合せもあります。職業別では大学生が大多数。

今年次初のORJC

2年目に入ったORJC活動計画の承認および今年次の派遣青年募集要項の承認を行なうため、第1回ORJC会議が3月8日(金)午前11時から電通東京本社で開催されました。出席者は、ORJC永井委員長をはじめ、祖父江、矢野、見田、田辺の各委員、実行委員、事務局員など合計16名で熱心な話し合いが行なわれました。

左から見田、祖父江、永井、田辺、矢野の各委員

第2回ORJC実行委 2年目の選考基準検討

3月25日(月)、午後1時から電通東京本社会議室で第2回ORJC実行委員会が開催されました。出席者は7名の実行委員と事務局長、事務局員3名の計11名。1985年次派遣青年の選考方法に関する細目についての検討、意見交換が行なわれました。

なお第1回ORJC実行委員会は2月8日(金)に電通東京本社で開かれ、今年次の活動計画、募集要項、審査基準などが検討されています。